

第 39 号

発行／札幌くらぶ

(財)札幌交響楽団内

札幌市中央区中島公園1番15号
(札幌コンサートホール内)

札幌くらぶ

'07年度札幌くらぶ総会開催

新年度の活動計画を承認



2007年度の札幌くらぶ総会が、4月28日(土)午後1時30分から札幌コンサートホール・キタラの2階大会議室で開催されました。

冒頭挨拶に立った上田文雄会長は「札幌くらぶは10年を経過しましたが、その原点は札幌を愛していること、そして札幌の音楽が本当に素晴らしいものとして私たちの心に響くことを応援することにあると思います」と述べ、更に「私は囃らずも札幌市長というポストにつくことになりました。音楽を愛するもの、札幌を愛するもの、そういう人間が札幌市

長になった。私はそういう立場を利用して行政の有利さを札幌に与えたいという気はございませんが、そういう人間を市長として選んで頂いた市民の皆様には敬意を表したいと思います」と述べられました。

また、来賓の西村札幌専務理事は「道の補助金が減少したなどのことはありますが、文化庁の補助を頂いたりして、経営は何とか軌道に乗っています」と述べられた後、札幌くらぶの「楽譜支援」に対する感謝や45周年記念のCD発売について触れられました。議事の内容については別紙をご覧ください。



ソリストに聞く

札幌交響楽団

首席チェロ奏者

いしかわ ゆうじ
石川 祐支さん

札幌でのリサイタルを
実現させたい!!



© MASAHIDE SATO

石川祐支さんのプロフィール

1977年名古屋市出身。8歳からチェロを始め、東京音楽大学に特待生として進学。同大を首席で卒業後研究科へ進み、01年修了。松下修也、星野明道、吉田顕、河野文昭、堀了介の各氏に師事。96年第2回ピパホール・チェロコンクールにて特別賞受賞。98年第8回室内楽コンクール第2位、99年第68回日本音楽コンクール第1位（第2位該当者なし）を獲得し、併せて黒柳賞受賞。岩崎淑氏主宰の沖縄国際音楽祭1999とイタリアのキジア音楽院との交換留学生として奨学金を得、マリオ・ブルネロ氏に学ぶ。02年5月第8回大垣音楽祭において最優秀新人賞を受賞。NHK-FM リサイタル、名曲リサイタルに出演。これまでに、東京交響楽団、東京シティフィル、セントラル愛知、札幌交響楽団と協演。04年秋よりシリウス弦楽四重奏団を結成し活動中。06年9月よりピアノの及川浩治、ヴァイオリンの石田泰尚と共にトリオ Bee 本格デビュー。04年4月から06年1月まで東京交響楽団首席奏者を務めた。06年4月より札幌交響楽団首席チェロ奏者。

2月の第496回定期演奏会にソリストとして出演され、難曲のショスタコーヴィチ作曲「チェロ協奏曲第1番」を熱演され、高い評価を得た石川さんにうかがいました。

— 2月定期では熱演でしたが、ご本人の感想からお話し下さい。

石川 一年半前に依頼を受けましたが、難しい曲でちょっとびっくりしました。しかし、早くから自分の中であたためることができ、昨年の11月過ぎくらいからきちっと練習し始めました。本番まで長い期間があつてよかったです。僕にとっては今までで一番良い演奏が出来たと思っています。

— ショスタコーヴィチという選曲についてはどうでしたか。

石川 この曲は僕もやってみたかった曲でした。暗譜するのが大変でしたし、技術的には、やはり大変ではありましたが、それよりも表現的にも難しい部分が多々あり苦勞しました。僕のこの曲に対する課題として、冷静でありつつも情熱的であることでした。曲が難しいので、それだけに陶酔するというか、のめり込んでしまうような状態になります。それでいて余裕を持って彼の生きていた時代を表現し切れるかということが問題でした。興奮し、陶酔してみえるからといって余裕が無いわけではなくて、あれは表現するための手段です。ショスタコーヴィチの難しさというのはとても口では説明のしようがない程、困難をきわめました。

— 普段一緒に弾いている札幌との協演はどうでしたか。

石川 とても有り難かったし、嬉しかったし、弾きやすかったです。一緒に演奏できて幸せでした。

— 自分が所属するオケとの協演はやりづらくはありませんでしたか。

石川 僕は逆に嬉しいですね。みんなが信頼してくれなければ、ソリストには抜擢されないはずですし、信頼してくれたからこそ出来たのだと思

います。オーケストラの皆さんがあたたかく見守っていてくれて、本当に嬉しく思いました。

— 今後、同じような機会があったら、どんな曲をやってみたいですか。

石川 ドヴォルザークもやってみたいし、尾高音楽監督とエルガー等の英国ものもやってみたいです。シューマンもあるし、やってみたい曲はたくさんあります。

— プロフィールを見ますと、多くの受賞歴がありますが、思い出に残っていることはありますか。

石川 99年に日本音楽コンクールで1位になった時に胴上げされたことでしょうか。結果発表の時、僕が1位で、それも2位該当者なしという発表が出たので、僕の関係者がみんな喜んでくれて、友達なんかもわっと集まってきて、会場で胴上げしてくれました。その時のイメージが、今でもずっと残っています。うれしかったです。恥ずかしくもありましたけど。その時はチャイコフスキーの「ロココの主題による変奏曲」を弾きました。それで事務局長の宮澤さんも僕のことを知って下さって、いまにつながります。ですから、知りあってもう10年になりますね。

— その後でキジアナ音楽院に留学されたそうですが、どんなところですか。

石川 イタリアのシエナにありまして、夏の2、3か月間だけに凄い先生が集まり、受講生は世界中から集まりレッスンしてもらおうというサマー・コースのようなものです。僕は世界的に有名なチェリストで、日本にも何度も来ているマリオ・ブルネロ教授という大先生にレッスンしてもらいました。この先生はチャイコフスキーコンクールの優勝者でもあり、最近では指揮をしながら演奏するというようなこともなさっています。

— 小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトの首席チェリストも務められたそうですが。

石川 もう8年くらい前のことです。その前の年の夏にサイトウ・キネン・オーケストラのジュニ

アの合宿があり、それに僕が参加しました。合宿のある夜のパーティーで小澤先生が「来年はオペラ・プロジェクトをやる」とおっしゃった時に、その場で皆が「僕も呼んで下さい」と言っていたので、すかさず僕も一緒に「やらせて下さい」とお願いしました。覚えていてくれるのだろうか、と思っていたのですが、ちゃんと呼んでもらえました。



— 昨年、ピアニストの及川浩治さん、神奈川フィル・ソロコンサートマスターの石田泰尚さんとピアノトリオ「Bee」を結成して活動されていますが、結成のきっかけは。

石川 及川さんがデビュー10周年の機会に、何か新しいことをしたいと思い、古澤巖さんが以前やられていた「タイフーン」のようなグループを創りたいと思ったのがきっかけのようです。及川さんと石田さんは前から知り合いで、石田さんが及川さんに僕を推薦してくださいました。個性的な3人がそろいました。

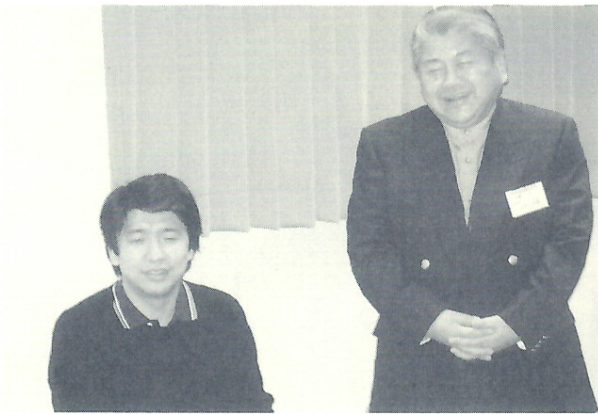
— 最後に今後の活動の抱負を。

石川 札幌ではまだ一度もリサイタルをやっていません。いつになるか分かりませんがぜひやってみたいと思っています。Kitaraの小ホールなどで出来れば最高だと思います。その時はぜひ聴きにいらして下さい。

(佐藤良次)

今年も和やかに懇親会

総会終了後、定期演奏会で「幻想交響曲」の熱演を鑑賞し、再び大会議室で昨年に続き懇親会が行われました。500円の「ワンコイン・パーティー」でした。会場には札幌事務局や両コンサートマスター、ご自分のリサイタルを宣伝する楽員さん、そして、当日の指揮者広上淳一さんも飛び入りで参加して下さい、一段と盛り上がりました。広上さんは「こんな応援団がある札幌が羨ましい」と述べられ、恒例となった色紙販売で色紙を買った会員に気軽にサインに応じて下さいました。当日の雰囲気の一部を写真でご紹介します。



札幌物語 38

札幌市民会館と札幌定期 1



札幌市民会館で定期演奏会を毎月行っていた札幌にとって、忘れられない演奏会が幾つかあります。当然、1961年9月6日の第1回創立披露定期演奏会はその最も大きな存在ですが、その1ヶ月前、練習中の中島児童会館に指揮者の近衛秀麿氏が現れたのです。近衛秀麿は山田耕作と共に日本のオーケストラを始めた人で、札幌が生まれた頃は近衛管弦楽団を、後にABC交響楽団などを主宰していた指揮者です。オーケストラに関係する人間なら、誰でもが知っている大きな存在でした。

中島児童会館に顔を出されたタイミングが丁度休憩になる時だったので、荒谷正雄氏とはもちろん、我々若い楽団員とも親しく話をされました。2年後の創立記念日'63年9月6日の第22回定期演奏会で、ベートーヴェンの交響曲第7番をドイツの名指揮者ワインガルトナーばりに、ご自分の編曲版で指揮されました。今日では考えられないことですが、本来は2本のホルンを4本使い、極めて分厚い音がするベートーヴェンでした。

次は、若い指揮者達の登場です。最初は第25回、'64年1月24日の若杉弘です。若いせいかなんとも頼りなげな指揮だったし、プログラムはシューベルトの交響曲第8番「未完成」、プロコフィエフの交響的物語「ピーターと狼」、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」、とい

う聴衆に知り尽くされたポピュラーな曲ばかりで、オーケストラにとっては大変だったのですが、格好良い指揮に惹かれて一生懸命演奏したようでした。

2番手は'64年4月10日、第28回定期での故岩城宏之氏です。プログラムも賑やかだったのですが、それにも増して元気な指揮でした。第1部では近衛秀麿と同じくベートーヴェンの交響曲第7番を指揮し、近衛氏と全く違って贅肉をそいだ演奏を要求しました。第2部のハチャトウリアンの「ガイーン」では、汗まみれの奮闘振り、オーケストラも煽られた演奏をしました。

飯守泰次郎は'65年1月20日の第36回に登場しました。一般的に、斉藤秀雄門下生の指揮者は要領の良い、見かけも良い指揮振りですが、飯守は剛直な指揮だったのです。が、音楽の流れはとてもスムーズでした。

若杉弘は'65年10月8日、第44回で再び登場します。この時の協演者は、フルートの王者ジャン・ピエール・ランパルでした。共演した曲はバッハの管弦楽組曲第2番と、モーツァルトのフルート協奏曲第2番ニ長調。演奏会でのバッハは札幌初めての指揮者無し、ランパルの吹き振りになりました。

[続く]
(竹津宜男)

from 「札幌くらぶ」

会員の溜り場のご利用を

以前にもお知らせいたしましたが、札幌くらぶ会員の溜り場として、南6西3（東向き）第2桂和ビル2Fの「りっこ」を指定いたしました。会員特別料金2500円でご協力をいただいています。コンサート終了後など、お誘いあわせてご利用下さいますよう、再度ご案内いたします。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 トランペット奏者

まえ かわ かず ひろ
前川 和弘 さん

ご出身は

福井県です。福井市の北、金沢寄りの当時は坂井郡、今は坂井市となっている町の出身です。

音楽との出会いは

中学校に入学する時に、近所に1年上の先輩がいて、その人がブラスバンドでトランペットをやっていて「君も入れよ」と、半ば強制的にブラスバンドに入らされ、それが最初の音楽との関わりになりました。それ以前に、何か楽器をならっていたというようなことはありませんでしたしブラスバンドでは、最初はユーフォニウムを担当させられたのですが、トランペットを見て「ああ、格好いいな～どうせやるならトランペットをやりたい」と思いました。1週間くらいしてから先生に「唇が腫れちゃって、マウスピースの小さな楽器にしてほしいんでトランペットを吹きたいんですけど」とお願いしたら「ああ、いいよ」と言ってもらって、トランペットを吹き始めたのが出発点です。

音楽を専門にと思った時期は

中学校2年生の時に、「将来の夢」という作文を書いた時に「将来はトランペッター」と書いていましたから、その頃から漠然とトランペット吹きになりたいな、という願望があったのでしょね。私をブラスバンドに誘った先輩も、将来はトランペット吹きになると言っていましたから、この人の後についていけば何とかなる、と子供心にも思っていました。高校もその先輩と同じでしたが、その頃から具体的に、トランペットをやっていくには音大を出なければいけない、そのためには、ピアノを習ったり歌を勉強したり、聴音をやったりしなくてはならない、というようなことが分かり始めて、自分で勉強したり、近所の音楽の先生に聴音を習ったり、ピアノを習い始めたり、といったようなことを始めました。



プロにと思った時期は

音大に入る時にはそう思っていました。その時にN響の先生について習っていましたが、もうその頃からゆくゆくはプロに思っていました。大学卒業後頑張っ、それで30歳までにプロになれなかったらきっぱりとラッパはやめよう、という覚悟を自分に課した記憶があります。

札幌への入団は

大学4年の10月に真駒内の青少年会館でオーディションを受けました。かなりの難関でしたが合格することができました。大学卒業とともに入団ということでしたが、卒業する年の2月に札幌の演奏旅行がありまして、本州を5か所くらい回りました。その時のプログラムにハイドンのトランペット・コンチェルトが入ってまして、当時首席の杉木さんがソリストを務めました。そのため、私はまだ団員でもなかったのですが光栄な事にメインを吹かせて頂きました。ものすごく緊張しました。まだ団員じゃないし、ここでへまをやったら合格を取り消されるんじゃないかなんて思いました。(笑)

趣味はいかがですか

釣りですね。子どもの頃から釣りは好きでした。今は専らルアーの海釣りを楽しんでいます。

将来の夢を

クラシックをもっと気軽に楽しんでもらわなくては、という思いから、おそば屋さんやレストランなどでミニコンサートをやってきました。今後も続けていければと思っています。

札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

おだ みきこ
織田 美貴子 さん

ご出身は

愛知県春日井市の出身です。

音楽との出会いは

3歳の時に、母のお友達の息子さんがヴァイオリンを習いにいっている教室に、母に連れていかれました。その時に自分から「私もやりたい」といったらしいのです。両親も、クラシック音楽に興味がありましたし、幼い私がヴァイオリンをじっと聴いている様子を見て、本人がやりたいのならと習わせてくれました。

教育学部のご出身だそうです

岐阜大学教育学部をこの3月に卒業しました。大学に進学する時に、音大も考えました。しかし、専門に音楽だけを学ぶことも魅力的でしたが、私は若いうちに音楽だけではなくもっと広くいろんなことを学ぶべきだと考えました。専門的に音楽も学べ、広く教養も身につけられる教育学部への進学を決めました。

プロとしてやっていこうと思ったのは

大学3年の夏に、チェコのプラハで音楽セミナーに参加しました。そこで、現地の教授にヴァイオリンのレッスンを受けるうちに「もっともっと音楽をつきつめてやっていこう」という気持ちになりました。元々、ヴァイオリンが好きでしたが、それを職業として生きていきたいと考えたのはこの時が初めてです。私にとっては人生の大きな転機となる体験でした。

国立の教育学部からオーケストラに入る人は少ないのでは

確かに少ないでしょうね。皆無ということではないと思いますが、私の周りにはほとんどいませんでした。

札幌を希望されたのは

実際に札幌の生の音を聴いたことはありませんでしたが、衛星放送で聴いたことがあり、非常に澄んだ響きのオーケストラ、という印象を強く受けました。こんなオーケストラで演奏できれば、と思っていました。



実際に聴いた印象は

やはり、透明感のある響きが素晴らしいと思いました。そして、北国のオーケストラなのに、非常にあたたかい響きのある音だと感じました。更に、キタラで聴く音の素晴らしさは大きな驚きでした。オーディションに合格できて本当に良かったと思っています。

北海道での暮らしはいかがですか

まだ短期間の経験しかしていませんが、暮らしやすい環境だと思います。雪や寒さなどいろいろ苦労もあると思いますが、北海道の人はとても親切であたたかい人が多いと感じました。夏は涼しいので気候的にも楽器には良いと思います。

趣味はお持ちですか

私は家にいるよりも外にいる方が好きです。時間のある時には、あちこち歩き回ったりするのが好きです。たまには札幌から遠い所にも行ってみたいと思っています。今は自動車は持っていませんが、将来自動車を持つようになったら、道内をあちこちドライブできるのを楽しみにしています。

ファンの皆さんに何か一言

まだ入団して日が浅く、いろいろ戸惑うこともありますが、夢だったことができるので、一生懸命頑張りたいと思います。周りの方々もよくして下さいますし、更に努力を重ねて、札幌の素晴らしい響きを紡ぎ出す力の一つになればと思っていますので、どうかあたたかく見守っていただきたいと思います。またこれからも、札幌への応援をよろしくお願いたします。

(佐藤良次)

from 「札響くらぶ」

楽員さんのリサイタルご案内

総会でも承認されましたが、本年度から、楽員さんの個人的なリサイタルも札響くらぶとして積極的に応援していこう、ということになりました。その第一弾として、二つのリサイタルをご紹介します。会員の皆様、ぜひチケットをお求めの上、足をお運び下さい

◆辻彩子ヴィオラリサイタル

2007年6月17日(日) 午後2時開演(1:30開場)

ザ・ルーテルホール 中央区大通西6仲通 TEL 011-251-1311

シューベルト/アルペジオーネ・ソナタ ヒンデミット/無伴奏ヴィオラ・ソナタ 他

入場料:3000円(全席自由・税込み)

チケットぴあ 他市内プレイガイド

◆宮城完爾(オーボエ)&坂口聡(ファゴット) ジョイント・リサイタル

2007年6月28日(木) 午後7時開演

札幌コンサートホール Kitara 小ホール

プーランク/オーボエとピアノのためのソナタ

サン＝サーンス/ファゴットとピアノのためのソナタ 他

入場料:3000円(一般)、1000円(高校生以下) 全席自由

会員特典 当日「札響くらぶ会員」と言うと出演者サイン入りプログラム贈呈

チケットぴあ 他市内プレイガイド

高橋聖純さんコンクール第1位に

札響のフルート副首席奏者高橋聖純さんが、5月2日～6日に滋賀県高島市で開催された「第12回びわ湖国際フルートコンクール」で見事に、一般部門1位、あわせて武者小路千家賞、滋賀県知事賞他を受賞されました。同コンクールは、世界各国よりの優秀なフルート奏者の発掘を目的に実施されているものです。これまでに、現在活躍中の著名なフルーティストが受賞しています。お祝い申し上げますと共に、一層のご活躍を期待します。

45周年記念 CD 録音の練習見学会開催

今年から3月31日が「オーケストラの日」と定められ、日本各地で協賛のコンサートなどが開催されました。しかし、札響は3月28日～31日キタラで45周年記念CDの収録を行うことになっていました。そのため、代替の行事として、3月27日に恵庭市民会館で行われた練習の見学会を開催しました。平日で遠隔地ということもあって、参加者は約30人と少し寂しいものでしたが、休憩を挟んで約3時間、熱のこもった練習を見学することができました。練習開始に先だって、尾高さんから、ドヴォルザークの8・9番や、エルガーの3番と「威風堂々第6番」のカップリングのCDはこれまで世界でほとんどなかったこと、また、世界発売する意義などについての解説がありました。当日はドヴォルザーク第9番「新世界より」の練習でしたが、時に尾高さんの解説もあり、音楽作りの大変さを実感させられた意義深い見学会でした。

編集後記

諸般の事情から、発行が1カ月遅れてしまいました。今年度の発行は少し変則的になりますが、ご容赦下さい。

CD収録練習見学会は凄い迫力と、指揮者とオーケストラの良好な関係を見せつけられるようなものでした。尾高さんも「こんなに聴衆が少ないのは初めて」と言っておられましたが、練習をキタラで

きたらこんなことはなかったのにと、残念でした。

総会後の懇親会は今年も本当に楽しいものでした。色紙販売の収益金は以前のように単純に札響に寄付するのではなく、楽譜購入支援金の一部にさせていただきますことになりました。今後の交流会でもご協力を。(佐藤良次)

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終わったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は07年9月発行の予定です。